

(第1報) 公室・私室の実態

甲子園短大

○矢沢正子

大阪大人間科学

山本恵子

目的：家族員の生活時間が多様化してきたことや各室に耐久消費財が普及したこと等により、住まいにおける公室・私室での生活内容、それらに対する考え方が変容してきていると思われる。本研究は、こうした実態を明らかにすると共に、これらの空間が居住者1人1人の心理的内面世界の中で、どのように位置づけられているのかを捉えることを目的とする。公室として「家族が何となく集まってくることの多い部屋」、私室として「自分(たち)だけの決まった部屋」を呈示し、イメージの分析を行った。また、イメージを形成している要因を検討することにより、今後の住生活のあり方を探ろうとした。本報では、公室・私室の現状を考察する。

方法：阪神間の女子短大生(自宅通学生)を対象にアンケート調査を実施した。有効回収数は232票、調査時期は1989年12月である。

結果：①8割が、自宅で週5日以上夕食をとるが、家族が全員揃うことは少なく、そのことに対して7割が何も感じていない。②食事以外に家族が集まる機会は、「よくある」群と「時々ある」「ない」群に2分する。主たる内容は、7割がTVを見ることである。③個室については、7割が1人の専用室、2割が姉妹との共用室である。親の出入りや個室生活への干渉は半数以上の世帯でみられる。④個室の希望としては、TV・電話の持ち込み要求が強い。⑤住宅内における午後(どこに誰と居たか)を調べると、個室滞在時間は、睡眠を除いてAV.84.9分であるが、TV・VTR・電話の設置によって滞在時間が延長している。家族の誰かと公室に滞在した時間はAV.130.1分である。